



EtherChannel およびリンクステート追跡の設定

この章では、Catalyst 2975 スイッチのレイヤ 2 ポート上で、EtherChannel を設定する方法について説明します。EtherChannel は、スイッチ、ルータ、およびサーバ間にフォールトトレラントな高速リンクを提供します。EtherChannel を使用すると、配線クローゼットおよびデータ センタ間の帯域幅を拡張できます。EtherChannel はネットワーク上でボトルネックの発生が見込まれるところに、どこでも配置できます。EtherChannel は、他のリンクに負荷を再分散させることによって、リンク切断から自動的に回復します。リンク障害が発生した場合、EtherChannel は人の介入なしに障害リンクからチャネル内の他のリンクにトラフィックをリダイレクトします。この章では、リンクステートの追跡を設定する方法についても説明します。特に明記しないかぎり、スイッチという用語はスタンドアロンスイッチおよびスイッチ スタックを意味します。



(注)

この章で使用するコマンドの構文および使用方法の詳細については、このリリースに対応するコマンドリファレンスを参照してください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 「EtherChannel の概要」 (P.35-1)
- 「EtherChannel の設定」 (P.35-10)
- 「EtherChannel、PAgP、および LACP ステータスの表示」 (P.35-20)
- 「リンクステート追跡の概要」 (P.35-20)
- 「リンクステート追跡の設定」 (P.35-23)

EtherChannel の概要

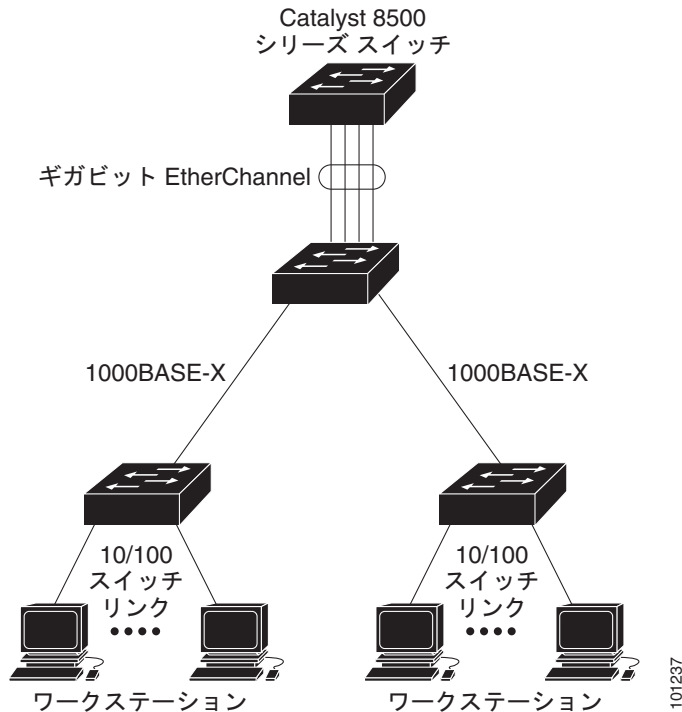
ここでは、EtherChannel の仕組みについて説明します。

- 「EtherChannel の概要」 (P.35-2)
- 「ポートチャネル インターフェイス」 (P.35-4)
- 「PAgP」 (P.35-5)
- 「LACP」 (P.35-6)
- 「EtherChannel の On モード」 (P.35-7)
- 「ロード バランシングおよび転送方式」 (P.35-8)
- 「EtherChannel およびスイッチ スタック」 (P.35-9)

EtherChannel の概要

EtherChannel は、単一の論理リンクにバンドルされた個々のファスト イーサネットまたはギガビット イーサネット リンクで構成されます (図 35-1 を参照)。

図 35-1 一般的な EtherChannel 構成



EtherChannel は、スイッチ間またはスイッチとホスト間に、最大 800 Mb/s (ファスト EtherChannel) または 8 Gb/s (ギガビット EtherChannel) の全二重帯域幅を提供します。

各 EtherChannel は、互換性のある設定のイーサネット ポートを 8 つまで使用して構成できます。各 EtherChannel 内のすべてのポートは、レイヤ 2 ポートとして設定する必要があります。EtherChannel の数は 6 に制限されています。詳細については、「[EtherChannel 設定時の注意事項](#)」(P.35-11) を参照してください。

EtherChannel には、Port Aggregation Protocol (PAgP; ポート集約プロトコル)、Link Aggregation Control Protocol (LACP)、または on のいずれかのモードを設定できます。EtherChannel の両端は同じモードで設定します。

- EtherChannel の一方の端を PAgP または LACP モードに設定すると、システムはもう一方の端とネゴシエーションし、アクティブにするポートを決定します。互換性のないポートは独立したステートになり、他の単一のリンクのようにデータトラフィックを伝送し続けます。ポートの設定は変更されませんが、ポートは EtherChannel には参加しません。
- EtherChannel を on モードに設定すると、ネゴシエーションは実行されません。スイッチは EtherChannel 内で互換性のあるすべてのポートを強制的にアクティブにします。EtherChannel のもう一方の端 (他のスイッチ上) も、同じように on モードに設定する必要があります。それ以外を設定した場合、パケットの損失が発生します。

EtherChannel はスタンドアロン スイッチ、スタック内の単一スイッチ、またはスタック内の複数のスイッチ (クロススタック EtherChannel と呼ばれています) 上に作成できます。図 35-2 および図 35-3 を参照してください。

EtherChannel 内のリンクで障害が発生すると、それまでその障害リンクで伝送されていたトラフィックが EtherChannel 内の残りのリンクに切り替えられます。スイッチでトラップがイネーブルになっている場合、スイッチ、EtherChannel、および失敗したリンクを区別したトラップが送信されます。EtherChannel の 1 つのリンク上の着信ブロードキャストおよびマルチキャスト パケットは、EtherChannel の他のリンクに戻らないようにブロックされます。

図 35-2 単一スイッチ EtherChannel

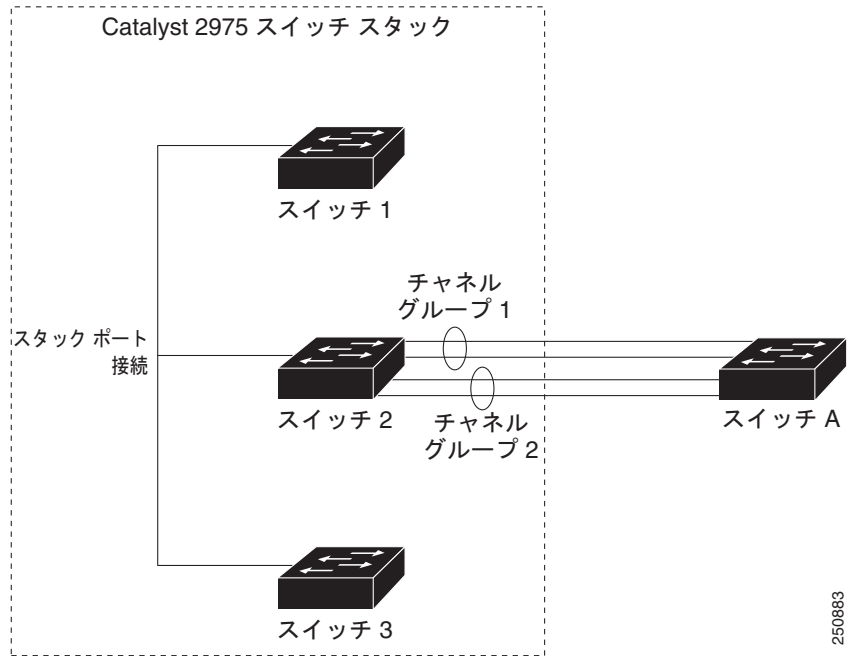
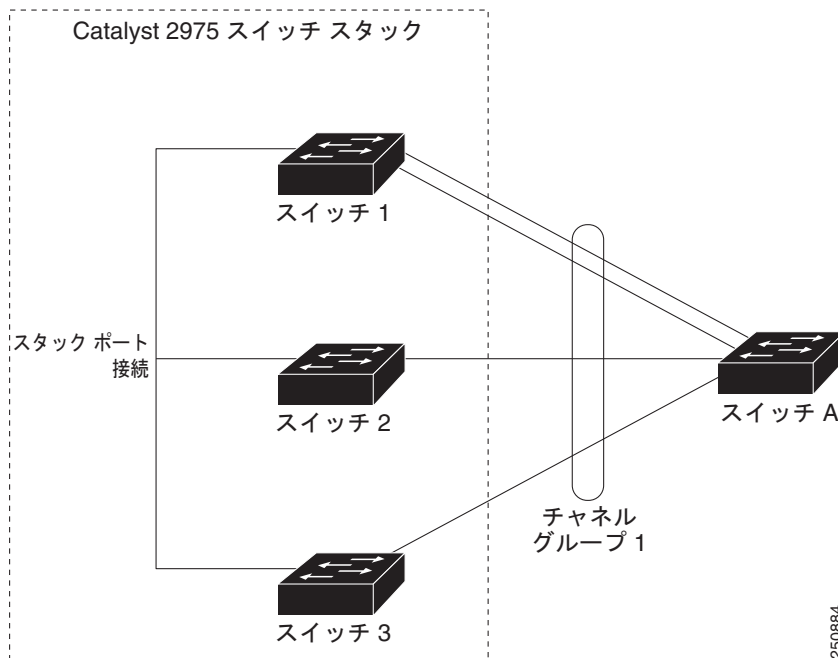


図 35-3 クロススタック EtherChannel



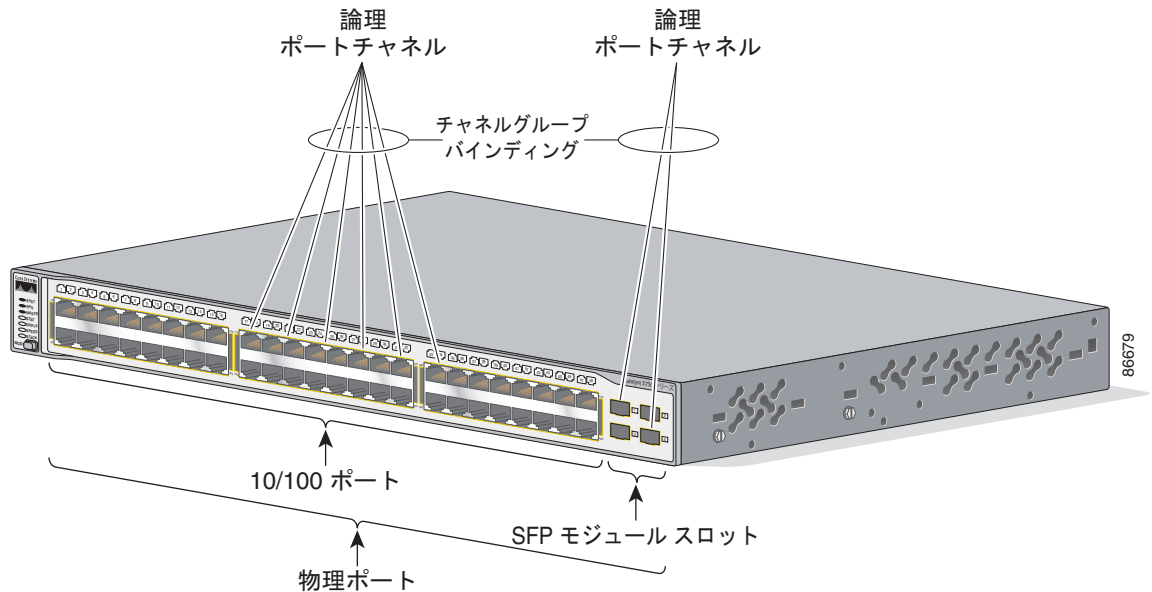
ポートチャンネル インターフェイス

レイヤ 2 EtherChannel を作成する場合、ポートチャンネル論理インターフェイスが必要となります。EtherChannel は次の方法で作成できます。

- **channel-group** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用します。チャンネルグループに最初の物理ポートが追加されると、ポートチャンネル論理インターフェイスが自動的に作成されます。**channel-group** コマンドにより、物理ポート（10/100/1000 ポート）と論理ポートがバインドされます（図 35-4 を参照）。
- **interface port-channel port-channel-number** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して、手動でポートチャンネル論理インターフェイスを作成します。次に、**channel-group channel-group-number** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用して、物理ポートに論理インターフェイスをバインドします。**channel-group-number** は **port-channel-number** と同じ値に設定することも、違う値を使用することもできます。新しい値を使用すると、**channel-group** コマンドによって新しいポートチャンネルが動的に作成されます。

各 EtherChannel には 1 ～ 6 番のポートチャンネル論理インターフェイスがあります。ポートチャンネルインターフェイス番号は、**channel-group** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドで指定された番号に対応しています。

図 35-4 物理ポート、論理ポートチャンネル、およびチャンネルグループの関係



EtherChannel の設定後、ポートチャンネル インターフェイスに適用した設定変更は、そのポートチャンネル インターフェイスに割り当てられたすべての物理ポートに適用されます。物理ポートに適用した設定変更は、設定を適用したポートだけに作用します。EtherChannel のすべてのポートのパラメータを変更するには、コンフィギュレーション コマンド（スパニングツリー コマンド、またはレイヤ 2 EtherChannel をトランクとして設定するコマンドなど）をポートチャンネル インターフェイスに適用します。

PAgP

Port Aggregation Protocol (PAgP) はシスコ独自のプロトコルで、シスコ製スイッチおよび PAgP をサポートするベンダーによってライセンス供与されたスイッチでだけ稼働します。PAgP を使用すると、イーサネット ポート間で PAgP パケットを交換することにより、EtherChannel を自動的に作成できます。PAgP を使用できるのは、単一スイッチ EtherChannel 構成の場合だけです。クロススタック EtherChannel の場合は、PAgP をイネーブルにできません。詳細については、「[EtherChannel 設定時の注意事項](#)」(P.35-11) を参照してください。

スイッチ スタックは PAgP を使用することによって、PAgP をサポートできるパートナーの識別情報、および各ポートの機能を学習します。次に、設定が類似している (スタック内の単一のスイッチ上の) ポートを、単一の論理リンク (チャネルまたは集約ポート) に動的にグループ化します。設定が類似しているポートをグループ化する場合の基準は、ハードウェア、管理、およびポート パラメータ制約です。たとえば、PAgP は速度、デュプレックス モード、ネイティブ VLAN (仮想 LAN)、VLAN 範囲、トランッキング ステータス、およびトランッキング タイプが同じポートをグループとしてまとめます。リンクをまとめて EtherChannel を形成したあとで、PAgP は単一スイッチ ポートとして、スパンニングツリーにそのグループを追加します。

PAgP モード

表 35-1 に、`channel-group` インターフェイス コンフィギュレーション コマンドでユーザが設定できる EtherChannel PAgP モードを示します。

表 35-1 EtherChannel PAgP モード

モード	説明
auto	ポートをパッシブ ネゴシエーション ステートにします。この場合、ポートは受信する PAgP パケットに応答しますが、PAgP パケット ネゴシエーションを開始することはありません。この設定では、PAgP パケットの伝送が最小化されます。EtherChannel メンバーがスイッチ スタックのさまざまなスイッチに属している場合 (クロススタック EtherChannel)、このモードはサポートされません。
desirable	ポートをアクティブ ネゴシエーション ステートにします。この場合、ポートは PAgP パケットを送信することによって、相手ポートとのネゴシエーションを開始します。EtherChannel メンバーがスイッチ スタック内で異なるスイッチに属している場合 (クロススタック EtherChannel)、このモードはサポートされません。

スイッチ ポートは、**auto** モードまたは **desirable** モードに設定された相手ポートとだけ PAgP パケットを交換します。**on** モードに設定されたポートは、PAgP パケットを交換しません。

auto モードおよび **desirable** モードでは、どちらの場合も、ポートは相手ポートとのネゴシエーションにより、ポート速度、レイヤ 2 EtherChannel の場合はトランッキング ステートおよび VLAN 番号などの条件に基づいて、EtherChannel を形成できるかどうかを判別できます。

PAgP モードが異なっても、モード間で互換性があるかぎり、ポートは EtherChannel を形成できます。次に例を示します。

- **desirable** モードのポートは、**desirable** モードまたは **auto** モードの別のポートとともに EtherChannel を形成できます。
- **auto** モードのポートは、**desirable** モードの別のポートとともに EtherChannel を形成できます。

どのポートも PAgP ネゴシエーションを開始しないため、**auto** モードのポートは、**auto** モードの別のポートとは EtherChannel を形成できません。

PAgP 対応のデバイスにスイッチを接続する場合、**non-silent** キーワードを使用すると、非サイレント動作としてスイッチ ポートを設定できます。**auto** モードまたは **desirable** モードとともに **non-silent** を指定しなかった場合は、サイレント モードが指定されていると見なされます。

サイレント モードを使用するのは、PAgP 非対応で、かつほとんどパケットを送信しないデバイスにスイッチを接続する場合です。サイレント パートナーの例は、トラフィックを生成しないファイル サーバ、またはパケット アナライザなどです。この場合、サイレント パートナーに接続された物理ポート上で PAgP を稼働させると、このスイッチ ポートが動作しなくなります。ただし、サイレントを設定すると、PAgP が動作してチャンネル グループにポートを結合し、このポートが伝送に使用されます。

PAgP と仮想スイッチの相互作用とデュアルアクティブ検出

仮想スイッチには、制御トラフィックとデータ トラフィックを伝送する Virtual Switch Link (VSL) によって接続された複数の Catalyst 6500 コア スイッチを使用できます。スイッチの 1 つはアクティブ モードです。その他のスイッチはスタンバイ モードです。冗長性のために、Catalyst 2975 スイッチなどのリモート スイッチは、Remote Satellite Link (RSL) によって仮想スイッチに接続されます。

2 つのスイッチ間の VSL に障害が発生した場合、片方のスイッチはもう一方のスイッチのステータスを認識できません。両方のスイッチがアクティブ モードに変更される可能性があり、ネットワーク内に重複した設定 (IP アドレスおよびブリッジ ID の重複など) を持つデュアルアクティブの状況が発生します。ネットワークがダウンする場合があります。

デュアルアクティブの状況を回避するには、コア スイッチが RSL を使用して PAgP の Protocol Data Unit (PDU; プロトコル データ ユニット) をリモート スイッチに送信します。PAgP の PDU はアクティブ スイッチを識別します。リモート スイッチは、コア スイッチの同期が取れるように、PDU をコア スイッチに転送します。アクティブ スイッチに障害またはリセットが発生した場合、スタンバイ スイッチがアクティブ スイッチを引き継ぎます。VSL がダウンした場合、片方のコア スイッチがもう一方のステータスを認識し、ステータスは変更されません。

PAgP と他の機能との相互作用

Dynamic Trunking Protocol (DTP) および Cisco Discovery Protocol (CDP) は、EtherChannel の物理ポートを使用してパケットを送受信します。トランク ポートは、番号が最も小さい VLAN 上で PAgP Protocol Data Unit (PDU) を送受信します。

レイヤ 2 EtherChannel では、チャンネル内で最初に起動するポートが EtherChannel に MAC アドレスを提供します。このポートがバンドルから削除されると、バンドル内の他のポートの 1 つが EtherChannel に MAC アドレスを提供します。レイヤ 3 EtherChannel の場合は、(**interface port-channel** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して) インターフェイスが作成された直後に、スタック マスターから MAC アドレスが割り当てられます。

PAgP が PAgP PDU を送受信するのは、PAgP が **auto** モードまたは **desirable** モードでイネーブルになっている、稼働状態のポート上だけです。

LACP

LACP は IEEE 802.3ad で定義されており、シスコ製スイッチが IEEE 802.3ad プロトコルに適合したスイッチ間のイーサネット チャンネルを管理できるようにします。LACP を使用すると、イーサネット ポート間で LACP パケットを交換することにより、EtherChannel を自動的に作成できます。

スイッチ スタックは LACP を使用することによって、LACP をサポートできるパートナーの識別情報、および各ポートの機能を学習します。次に、設定が類似しているポートを単一の論理リンク (チャンネルまたは集約ポート) に動的にグループ化します。設定が類似しているポートをグループ化する場合の基準は、ハードウェア、管理、およびポート パラメータ制約です。たとえば、LACP は速度、デュブ

レックス モード、ネイティブ VLAN、VLAN 範囲、トランキング ステータス、およびトランキング タイプが同じポートをグループとしてまとめます。リンクをまとめて EtherChannel を形成したあとで、LACP は単一スイッチ ポートとして、スパニングツリーにそのグループを追加します。

LACP モード

表 35-2 に、**channel-group** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドでユーザが設定できる EtherChannel LACP モードを示します。

表 35-2 EtherChannel LACP モード

モード	説明
active	ポートをアクティブ ネゴシエーション ステートにします。この場合、ポートは LACP パケットを送信することによって、相手ポートとのネゴシエーションを開始します。
passive	ポートはパッシブ ネゴシエーション ステートになります。この場合、ポートは受信する LACP パケットに応答しますが、LACP パケット ネゴシエーションを開始することはありません。これにより、LACP パケットの送信を最小限に抑えます。

active モードおよび **passive** LACP モードでは、どちらの場合も、ポートは相手ポートとのネゴシエーションにより、ポート速度、レイヤ 2 EtherChannel の場合はトランキング ステートおよび VLAN 番号などの条件に基づいて、EtherChannel を形成できるかどうかを判別できます。

LACP モードが異なっても、モード間で互換性があるかぎり、ポートは EtherChannel を形成できます。次に例を示します。

- **active** モードのポートは、**active** モードまたは **passive** モードの別のポートとともに EtherChannel を形成できます。
- どのポートも LACP ネゴシエーションを開始しないため、**passive** モードのポートは、**passive** モードの別のポートとは EtherChannel を形成できません。

LACP と他の機能との相互作用

DTP および CDP は、EtherChannel の物理ポートを介してパケットを送受信します。トランク ポートは、番号が最も小さい VLAN 上で LACP PDU を送受信します。

レイヤ 2 EtherChannel では、チャンネル内で最初に起動するポートが EtherChannel に MAC アドレスを提供します。このポートがバンドルから削除されると、バンドル内の他のポートの 1 つが EtherChannel に MAC アドレスを提供します。

LACP が LACP PDU を送受信するのは、LACP が **active** モードまたは **passive** モードでイネーブルになっている稼動状態のポートとの間だけです。

EtherChannel の On モード

EtherChannel の **on** モードは、EtherChannel の手動設定に使用します。**on** モードを使用すると、ポートはネゴシエーションせずに強制的に EtherChannel に参加します。リモート デバイスが PAgP や LACP をサポートしていない場合にこの **on** モードが役立ちます。**on** モードでは、リンクの両端のスイッチが **on** モードに設定されている場合だけ EtherChannel を使用できます。

同じチャンネル グループの **on** モードで設定されたポートは、速度やデュプレックスのようなポート特性に互換性を持たせる必要があります。**on** モードで設定されていたとしても、互換性のないポートは **suspended** ステートになります。



注意

on モードでの作業は慎重に行ってください。このモードは手動による設定が必要です。EtherChannel の両端のポートには同じ内容を設定する必要があります。グループの設定を誤ると、パケット損失またはスパンニングツリー ループが発生する可能性があります。

ロード バランシングおよび転送方式

EtherChannel は、フレーム内のアドレスに基づいて形成されたバイナリ パターンの一部を、チャンネル内の 1 つのリンクを選択する数値に縮小することによって、チャンネル内のリンク間でトラフィックのロード バランシングを行います。EtherChannel のロード バランシングには、MAC アドレスまたは IP アドレス、送信元アドレスや宛先アドレスのどちらか一方、またはその両方のアドレスを使用できます。選択したモードは、スイッチ上で設定されているすべての EtherChannel に適用されます。ロード バランシングおよび転送方式を設定するには、**port-channel load-balance** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

送信元 MAC アドレス転送の場合、EtherChannel に転送されたパケットは、着信パケットの送信元 MAC アドレスに基づいてチャンネル ポート間で分配されます。したがって、ロード バランシングを行うために、送信元ホストが異なるパケットはそれぞれ異なるチャンネル ポートを使用しますが、送信元ホストが同じパケットは同じチャンネル ポートを使用します。

宛先 MAC アドレス転送の場合、EtherChannel に転送されたパケットは、着信パケットに指定されている宛先ホストの MAC アドレスに基づいてチャンネル ポート間で分配されます。したがって、宛先が同じパケットは同じポートに転送され、宛先の異なるパケットはそれぞれ異なるチャンネル ポートに転送されます。

送信元および宛先 MAC アドレス転送の場合、EtherChannel に転送されたパケットは、送信元および宛先の両方の MAC アドレスに基づいてチャンネル ポート間で分配されます。この転送方式は、負荷分散の送信元 MAC アドレス転送方式と宛先 MAC アドレス転送方式を組み合わせたものです。特定のスイッチに対して送信元 MAC アドレス転送と宛先 MAC アドレス転送のどちらが適切であるかが不明な場合に使用できます。送信元および宛先 MAC アドレス転送の場合、ホスト A からホスト B、ホスト A からホスト C、およびホスト C からホスト B に送信されるパケットは、それぞれ異なるチャンネル ポートを使用できます。

送信元 IP アドレスベース転送の場合、EtherChannel に転送されたパケットは、着信パケットの送信元 IP アドレスに基づいて EtherChannel ポート間で分配されます。したがって、ロード バランシングを行うために、IP アドレスが異なるパケットはそれぞれ異なるチャンネル ポートを使用しますが、IP アドレスが同じパケットは同じチャンネル ポートを使用します。

宛先 IP アドレスベース転送の場合、EtherChannel に転送されたパケットは、着信パケットの宛先 IP アドレスに基づいて EtherChannel ポート間で分配されます。したがって、ロード バランシングを行うために、同じ送信元 IP アドレスから異なる宛先 IP アドレスに送信されるパケットは、異なるチャンネル ポートに送信できます。ただし、異なる送信元 IP アドレスから同じ宛先 IP アドレスに送信されるパケットは、常に同じチャンネル ポートで送信されます。

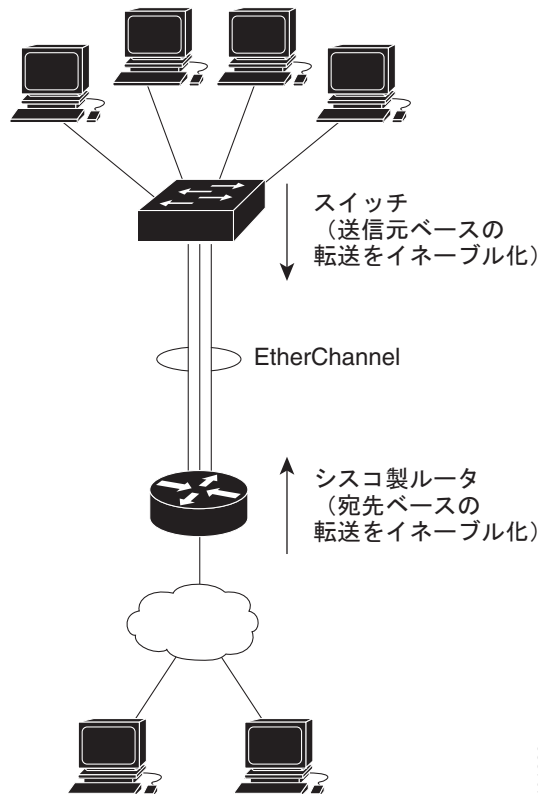
送信元/宛先 IP アドレスベース転送の場合、パケットは EtherChannel に送信され、着信パケットの送信元および宛先の両方の IP アドレスに基づいて EtherChannel ポート間で分配されます。この転送方式は、送信元 IP アドレスベース転送方式と宛先 IP アドレスベース転送方式を組み合わせたものです。特定のスイッチに対して送信元 IP アドレスベース転送と宛先 IP アドレスベース転送のどちらが適切であるかが不明な場合に使用できます。この方式では、IP アドレス A から IP アドレス B に、IP アドレス A から IP アドレス C に、および IP アドレス C から IP アドレス B に送信されるパケットは、それぞれ異なるチャンネル ポートを使用できます。

ロード バランシング方式ごとに利点が異なります。ロード バランシング方式は、ネットワーク内のスイッチの位置、および負荷分散が必要なトラフィックの種類に基づいて選択する必要があります。

図 35-5 では、EtherChannel が 4 つのワークステーションからのデータを集約するスイッチからルータ

と通信を行っています。ルータは単一 MAC アドレス デバイスなので、スイッチ EtherChannel で送信元ベース転送を行うことにより、スイッチがルータの使用可能なすべての帯域幅を使用することが保証されます。ルータは、宛先アドレスベース転送を行うように設定されます。これは、多数のワークステーションで、トラフィックがルータ EtherChannel から均等に分配されることになっているためです。設定で一番種類が多くなるオプションを使用してください。たとえば、チャンネル上のトラフィックが単一 MAC アドレスを宛先とする場合、宛先 MAC アドレスを使用すると、チャンネル内の同じリンクが常に選択されます。ただし、送信元アドレスまたは IP アドレスを使用した方が、ロード バランシングの効率がよくなる場合があります。

図 35-5 負荷の分散および転送方式



101239

EtherChannel およびスイッチ スタック

EtherChannel に参加しているポートを持つスタック メンバーに障害が発生するか、またはこのスタック メンバーがスタックから脱退すると、スタック マスターはこのスタック メンバーのスイッチ ポートを EtherChannel から削除します。EtherChannel 内にポートが残っている場合、これらのポートは引き続き接続された状態を維持します。

既存のスタックにスイッチが追加されると、新しいスイッチはスタック マスターから実行コンフィギュレーションを受信し、EtherChannel 関連のスタック設定を使用して自身の設定を更新します。スタック メンバーは動作情報（動作中のポート リスト、およびチャンネル メンバーであるポートのリスト）も受信します。

EtherChannel が設定された 2 つのスタックを結合すると、セルフループ ポートになります。スパンニング ツリーはこの状況を検出して、適宜に対応します。権利を獲得したスイッチ スタックでは PAgP または LACP 設定が変更されませんが、権利を獲得しなかったスイッチ スタックでは、スタックの再起動後に PAgP または LACP 設定が失われます。

PAgP を使用すると、スタック マスターが障害を起こすかスタックから脱退した場合、新しいスタック マスターが選択されます。EtherChannel の帯域幅が変更されないかぎり、スパニングツリーの再コンバージェンスは発生しません。新しいスタック マスターにより、スタック メンバーの設定とスタック マスターの設定が同期されます。古いスタック マスター上にあるポートが EtherChannel に含まれる場合を除き、PAgP 設定はスタック マスターの変更による影響を受けません。

LACP を使用すると、システム ID ではスタック マスターからのスタック MAC アドレスが使用され、スタック マスターが変わると、LACP システム ID が変わることがあります。LACP システム ID が変わると、EtherChannel 全体がフラップし、STP 再コンバージェンスが発生します。マスターのフェールオーバー中にスタック MAC アドレスを変えるかどうかを制御するには、**stack-mac persistent timer** コマンドを使用します。

スイッチ スタックの詳細については、第 6 章「スイッチ スタックの管理」を参照してください。

EtherChannel の設定

ここでは、次の設定情報について説明します。

- 「EtherChannel のデフォルト設定」(P.35-10)
- 「EtherChannel 設定時の注意事項」(P.35-11)
- 「レイヤ 2 EtherChannel の設定」(P.35-12) (必須)
- 「EtherChannel ロード バランシングの設定」(P.35-15) (任意)
- 「PAgP 学習方式およびプライオリティの設定」(P.35-16) (任意)
- 「LACP ホットスタンバイ ポートの設定」(P.35-18) (任意)



(注) 必ず、ポートを正しく設定してください。詳細については、「EtherChannel 設定時の注意事項」(P.35-11) を参照してください。



(注) EtherChannel の設定後、ポートチャネル インターフェイスに適用した設定変更は、そのポートチャネル インターフェイスに割り当てられたすべての物理ポートに適用されます。また、物理ポートに適用した設定変更は、設定を適用したポートだけに作用します。

EtherChannel のデフォルト設定

表 35-3 に、EtherChannel のデフォルト設定を示します。

表 35-3 EtherChannel のデフォルト設定

機能	デフォルト設定
チャネル グループ	割り当てなし
ポートチャネル論理インターフェイス	未定義
PAgP モード	デフォルトなし
PAgP 学習方式	すべてのポートで集約ポート ラーニング
PAgP プライオリティ	すべてのポートで 128
LACP モード	デフォルトなし

表 35-3 EtherChannel のデフォルト設定 (続き)

機能	デフォルト設定
LACP 学習方式	すべてのポートで集約ポート ラーニング
LACP ポート プライオリティ	すべてのポートで 32768
LACP システム プライオリティ	32768
LACP システム ID	LACP システム プライオリティ、およびスタック MAC アドレス
ロード バランシング	着信パケットの送信元 MAC アドレスに基づいてスイッチ上で負荷を分散

EtherChannel 設定時の注意事項

EtherChannel ポートを正しく設定していない場合は、ネットワーク ループおよびその他の問題を回避するために、一部の EtherChannel ポートが自動的にディセーブルになります。設定上の問題を防ぐため、次の注意事項に従ってください。

- スイッチ スタック上では、6 を超える数の EtherChannel を設定しないでください。
- PAgP EtherChannel は、同じタイプのイーサネット ポートを 8 つまで使用して設定します。
- LACP EtherChannel は、同じタイプのイーサネット ポートを 16 まで使用して設定します。最大 8 つのポートを active モードに、最大 8 つのポートを standby モードにできます。
- EtherChannel 内のすべてのポートを同じ速度および同じデュプレックス モードで動作するように設定します。
- EtherChannel 内のすべてのポートをイネーブルにします。shutdown インターフェイス コンフィギュレーション コマンドによってディセーブルにされた EtherChannel 内のポートは、リンク障害として扱われます。そのポートのトラフィックは、EtherChannel 内の他のポートの 1 つに転送されます。
- グループを初めて作成したときには、そのグループに最初に追加されたポートのパラメータ設定値をすべてのポートが引き継ぎます。次のパラメータのいずれかで設定を変更した場合は、グループ内のすべてのポートでも変更する必要があります。
 - 許可 VLAN リスト
 - 各 VLAN のスパニングツリー パス コスト
 - 各 VLAN のスパニングツリー ポート プライオリティ
 - スパニングツリー PortFast の設定
- 1 つのポートが複数の EtherChannel グループのメンバーになるように設定しないでください。
- 1 つの EtherChannel に PAgP モードと LACP モードの両方を設定しないでください。PAgP および LACP が稼動している複数の EtherChannel グループは、同じスイッチまたはスタック内の別のスイッチ上で共存できます。個々の EtherChannel グループは PAgP または LACP のいずれかを実行できますが、相互運用はできません。
- EtherChannel の一部として Switched Port Analyzer (SPAN; スイッチド ポート アナライザ) 宛先ポートを設定しないでください。
- EtherChannel の一部としてセキュア ポートを設定したり、セキュア ポートの一部として EtherChannel を設定したりしないでください。

- EtherChannel のアクティブ メンバーであるポート、またはこれからアクティブ メンバーにするポートを IEEE 802.1x ポートとして設定しないでください。EtherChannel ポートで IEEE 802.1x をイネーブルにしようとすると、エラー メッセージが表示され、IEEE 802.1x はイネーブルになりません。
- EtherChannel がスイッチ インターフェイス上に設定されている場合、**dot1x system-auth-control** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して、IEEE 802.1x をスイッチ上でグローバルにイネーブルにする前に、EtherChannel の設定をインターフェイスから削除してください。
- レイヤ 2 EtherChannel の場合
 - EtherChannel 内のすべてのポートを同じ VLAN に割り当てるか、またはトランクとして設定してください。複数のネイティブ VLAN に接続されるポートは、EtherChannel を形成できません。
 - トランク ポートから EtherChannel を設定する場合は、すべてのトランクでトランッキング モード (Inter-Switch Link (ISL; スイッチ間リンク) または IEEE 802.1Q) が同じであることを確認してください。EtherChannel ポートのトランクのモードが一致していないと、予想外の結果になる可能性があります。
 - EtherChannel は、トランッキング レイヤ 2 EtherChannel 内のすべてのポート上で同じ VLAN 許容範囲をサポートしています。VLAN 許容範囲が一致していないと、PAgP が **auto** モードまたは **desirable** モードに設定されていても、ポートは EtherChannel を形成しません。
 - スパニングツリー パス コストが異なるポートは、設定上の矛盾がないかぎり、EtherChannel を形成できます。異なるスパニングツリー パス コストを設定すること自体は、EtherChannel を形成するポートの矛盾にはなりません。
- クロススタック EtherChannel 設定の場合は、EtherChannel 用のすべてのポートが LACP 用に設定されているか、**channel-group channel-group-number mode on** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドでチャンネル グループに含まれるように手動設定されているかを確認します。PAgP プロトコルは、クロススタック EtherChannel ではサポートされません。
- クロススタック EtherChannel が設定されていて、スイッチ スタックが分割されている場合、ループおよび転送が正しく動作しないことがあります。

レイヤ 2 EtherChannel の設定

レイヤ 2 EtherChannel を設定するには、**channel-group** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用して、チャンネル グループにポートを割り当てます。このコマンドにより、ポートチャンネル論理インターフェイスが自動的に作成されます。

auto モードか **desirable** モードのポートで PAgP をイネーブルにした場合は、**on** モードか LACP モードに再設定してから、このポートをクロススタック EtherChannel に追加する必要があります。PAgP では、クロススタック EtherChannel がサポートされません。

レイヤ 2 EtherChannel にレイヤ 2 イーサネット ポートを割り当てるには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は必須です。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface <i>interface-id</i>	物理ポートを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。 指定できるインターフェイスとして、物理ポートも含まれます。 PAgP EtherChannel の場合、同じタイプおよび速度のポートを 8 つまで同じグループに設定できます。 LACP EtherChannel の場合、同じタイプのイーサネット ポートを 16 まで設定できます。最大 8 つのポートを active モードに、最大 8 つのポートを standby モードにできます。
ステップ 3	switchport mode {access trunk} switchport access vlan <i>vlan-id</i>	すべてのポートをスタティックアクセス ポートとして同じ VLAN に割り当てるか、またはトランクとして設定します。 ポートをスタティックアクセス ポートとして設定する場合は、ポートを 1 つの VLAN にだけ割り当ててください。指定できる範囲は 1 ~ 4094 です。

コマンド	目的
ステップ 4 <code>channel-group channel-group-number mode {auto [non-silent] desirable [non-silent] on} {active passive}</code>	<p>チャンネル グループにポートを割り当て、PAgP モードまたは LACP モードを指定します。</p> <p><code>channel-group-number</code> の範囲は 1 ~ 6 です。</p> <p><code>mode</code> には、次のキーワードのいずれか 1 つを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • auto : PAgP デバイスが検出された場合に限り、PAgP をイネーブルにします。ポートをパッシブ ネゴシエーション ステートにします。この場合、ポートは受信する PAgP パケットに応答しますが、PAgP パケット ネゴシエーションを開始することはありません。EtherChannel メンバーがスイッチ スタック内で異なるスイッチに属している場合、このキーワードはサポートされません。 • desirable : PAgP を無条件でイネーブルにします。ポートをアクティブ ネゴシエーション ステートにします。この場合、ポートは PAgP パケットを送信することによって、相手ポートとのネゴシエーションを開始します。EtherChannel メンバーがスイッチ スタック内で異なるスイッチに属している場合、このキーワードはサポートされません。 • on : PAgP または LACP を使用せずにポートが強制的にチャンネル化されます。<code>on</code> モードの場合、EtherChannel が存在するのは、<code>on</code> モードのポート グループが同じく <code>on</code> モードの別のポート グループに接続される場合だけです。 • non-silent : (任意) PAgP 対応のデバイスに接続されたスイッチのポートが <code>auto</code> または <code>desirable</code> モードの場合に、非サイレント動作を行うようにこのポートを設定します。<code>non-silent</code> を指定しなかった場合は、サイレントが指定されたものと見なされます。サイレント設定は、ファイル サーバまたはパケット アナライザとの接続に適しています。サイレントを設定すると、PAgP が動作してチャンネル グループにポートを結合し、このポートが伝送に使用されます。 • active : LACP デバイスが検出された場合に限り、LACP をイネーブルにします。ポートをアクティブ ネゴシエーション ステートにします。この場合、ポートは LACP パケットを送信することによって、相手ポートとのネゴシエーションを開始します。 • passive : ポート上で LACP をイネーブルにして、ポートをパッシブ ネゴシエーション ステートにします。この場合、ポートは受信する LACP パケットに応答しますが、LACP パケット ネゴシエーションを開始することはありません。 <p>スイッチおよびデバイスのモードの互換性に関する情報については、「PAgP モード」(P.35-5) および「LACP モード」(P.35-7) を参照してください。</p>
ステップ 5 <code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 6 <code>show running-config</code>	設定を確認します。
ステップ 7 <code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

EtherChannel グループからポートを削除するには、**no channel-group** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用します。

次に、スタック内の 1 つのスイッチに EtherChannel を設定する例を示します。2 つのポートを VLAN 10 のスタティック アクセス ポートとして、PAgP モードが **desirable** であるチャンネル 5 に割り当てます。

```
Switch# configure terminal
Switch(config)# interface range gigabitethernet2/0/1 -2
Switch(config-if-range)# switchport mode access
Switch(config-if-range)# switchport access vlan 10
Switch(config-if-range)# channel-group 5 mode desirable non-silent
Switch(config-if-range)# end
```

次に、スタック内の 1 つのスイッチに EtherChannel を設定する例を示します。2 つのポートは VLAN 10 のスタティックアクセス ポートとして、LACP モードが **active** であるチャンネル 5 に割り当てられます。

```
Switch# configure terminal
Switch(config)# interface range gigabitethernet2/0/1 -2
Switch(config-if-range)# switchport mode access
Switch(config-if-range)# switchport access vlan 10
Switch(config-if-range)# channel-group 5 mode active
Switch(config-if-range)# end
```

次に、クロススタック EtherChannel を設定する例を示します。この例では LACP パッシブ モードを使用し、スタック メンバー 2 の 2 つのポートとスタック メンバー 3 の 1 つのポートを、VLAN 10 のスタティックアクセス ポートとしてチャンネル 5 に割り当てます。

```
Switch# configure terminal
Switch(config)# interface range gigabitethernet2/0/4 -5
Switch(config-if-range)# switchport mode access
Switch(config-if-range)# switchport access vlan 10
Switch(config-if-range)# channel-group 5 mode active
Switch(config-if-range)# exit
Switch(config)# interface gigabitethernet3/0/3
Switch(config-if)# switchport mode access
Switch(config-if)# switchport access vlan 10
Switch(config-if)# channel-group 5 mode active
Switch(config-if)# exit
```

EtherChannel ロード バランシングの設定

ここでは、送信元ベースまたは宛先ベースの転送方式を使用することによって、EtherChannel のロード バランシングを設定する手順について説明します。詳細については、「[ロード バランシングおよび転送方式](#)」(P.35-8) を参照してください。

EtherChannel のロード バランシングを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>port-channel load-balance {dst-ip dst-mac src-dst-ip src-dst-mac src-ip src-mac}</code>	EtherChannel のロード バランシング方式を設定します。 デフォルトは src-mac です。 次のいずれかの負荷分散方式を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • dst-ip : 宛先ホスト IP アドレスに基づいて負荷を分散します。 • dst-mac : 着信パケットの宛先ホスト MAC アドレスに基づいて負荷を分散します。 • src-dst-ip : 送信元および宛先ホスト IP アドレスに基づいて負荷を分散します。 • src-dst-mac : 送信元および宛先ホスト MAC アドレスに基づいて負荷を分散します。 • src-ip : 送信元ホスト IP アドレスに基づいて負荷を分散します。 • src-mac : 着信パケットの送信元 MAC アドレスに基づいて負荷を分散します。
ステップ 3	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show etherchannel load-balance</code>	設定を確認します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

EtherChannel のロード バランシングをデフォルトの設定に戻す場合は、**no port-channel load-balance** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

PAgP 学習方式およびプライオリティの設定

ネットワーク デバイスは、PAgP 物理ラーナーまたは集約ポート ラーナーに分類されます。物理ポートによってアドレスを学習し、その知識に基づいて送信を指示するデバイスは物理ラーナーです。集約 (論理) ポートによってアドレスを学習するデバイスは、集約ポート ラーナーです。学習方式はリンクの両端で同じ方式に設定する必要があります。

デバイスとそのパートナーが両方とも集約ポート ラーナーの場合、論理ポートチャネル上のアドレスを学習します。デバイスは EtherChannel のいずれかのポートを使用することによって、送信元にパケットを送信します。集約ポート ラーニングを使用している場合、どの物理ポートにパケットが届くかは重要ではありません。

PAgP は、パートナー デバイスが物理ラーナーの場合およびローカル デバイスが集約ポート ラーナーの場合には自動検出できません。したがって、物理ポートでアドレスを学習するには、ローカル デバイスに手動で学習方式を設定する必要があります。また、負荷の分散方式を送信元ベース分散に設定して、指定された送信元 MAC アドレスが常に同じ物理ポートに送信されるようにする必要があります。

グループ内の 1 つのポートですべての伝送を行うように設定して、他のポートをホット スタンバイに使用することもできます。選択された 1 つのポートでハードウェア信号が検出されなくなった場合は、数秒以内に、グループ内の未使用のポートに切り替えて動作させることができます。パケット伝送用に

常に選択されるように、ポートを設定するには、**pagp port-priority** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用してプライオリティを変更します。プライオリティが高いほど、そのポートが選択される可能性が高まります。



(注)

CLI (コマンドライン インターフェイス) で **physical-port** キーワードを指定した場合でも、スイッチがサポートするのは、集約ポート上でのアドレス ラーニングだけです。**pagp learn-method** コマンドおよび **pagp port-priority** コマンドは、スイッチ ハードウェアに対して無効です。ただし、このコマンドは物理ポートでのアドレス学習だけをサポートするデバイスとの間で PAgP インターオペラビリティを確立する場合に必要となります。

Catalyst 2975 スイッチとのリンク パートナーが物理ラーナー (Catalyst 1900 スイッチ等) である場合、**pagp learn-method physical-port** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用して Catalyst 2975 スイッチを物理ラーナーとして設定することを推奨します。送信元 MAC アドレスに基づいて負荷の分散方式を設定するには、**port-channel load-balance src-mac** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。このように設定すると、送信元アドレスの学習元である EtherChannel 内の同じポートを使用して、パケットが Catalyst 1900 スイッチに送信されます。**pagp learn-method** コマンドは、このような場合だけ使用してください。

スイッチを PAgP 物理ポート ラーナーとして設定し、バンドル内の同じポートがパケット送信用として選択されるようにプライオリティを調整するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface interface-id	伝送ポートを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	pagp learn-method physical-port	PAgP 学習方式を選択します。 デフォルトでは、 aggregation-port learning が選択されています。つまり、EtherChannel 内のポートのいずれかを使用して、パケットが送信元に送信されます。集約ポート ラーニングを使用している場合、どの物理ポートにパケットが届くかは重要ではありません。 物理ラーナーである別のスイッチに接続するには、 physical-port を選択します。 port-channel load-balance グローバル コンフィギュレーション コマンドは、必ず src-mac に設定してください (「EtherChannel ロード バランシングの設定」(P.35-15) を参照)。 学習方式はリンクの両端で同じ方式に設定する必要があります。
ステップ 4	pagp port-priority priority	選択したポートがパケット伝送用として選択されるように、プライオリティを割り当てます。 <i>priority</i> の範囲は、0 ~ 255 です。デフォルト値は 128 です。プライオリティが高いほど、そのポートが PAgP の伝送に使用される可能性が高まります。
ステップ 5	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。

	コマンド	目的
ステップ 6	<code>show running-config</code> または <code>show pagp channel-group-number internal</code>	設定を確認します。
ステップ 7	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

プライオリティをデフォルト設定に戻すには、**no pagp port-priority** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用します。学習方式をデフォルト設定に戻すには、**no pagp learn-method** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用します。

LACP ホットスタンバイ ポートの設定

イネーブルの場合、LACP はチャンネル内の LACP 互換ポート数を最大に設定しようとします (最大 16 ポート)。同時にアクティブになれる LACP リンクは 8 つだけです。リンクが追加されるとソフトウェアによってホットスタンバイモードになります。アクティブ リンクの 1 つが非アクティブになると、ホットスタンバイモードのリンクが代わりにアクティブになります。

9 つ以上のリンクが EtherChannel グループとして設定された場合、ソフトウェアは LACP プライオリティに基づいてアクティブにするホットスタンバイポートを決定します。ソフトウェアは、LACP を操作するシステム間のすべてのリンクに、以下の要素 (プライオリティ順) で構成された一意のプライオリティを割り当てます。

- LACP システム プライオリティ
- システム ID (スイッチの MAC アドレス)
- LACP ポート プライオリティ
- ポート番号

プライオリティを比較する場合、数値的により低い方が高いプライオリティを持っています。プライオリティは、ハードウェア上の制約がある場合に、すべての互換ポートが集約されないように、スタンバイモードにするポートを決定します。

アクティブポートかホットスタンバイポートかを判別するには、次の (2 つの) 手順を使用します。はじめに、数値的に低いシステムプライオリティとシステム ID を持つシステムの方を選びます。次に、ポートプライオリティおよびポート番号の値に基づいて、そのシステムのアクティブポートとホットスタンバイポートを決定します。他のシステムのポートプライオリティとポート番号の値は使用されません。

ソフトウェアのアクティブおよびスタンバイリンクの選択方法に影響を与えるように、LACP システムプライオリティおよび LACP ポートプライオリティのデフォルト値を変更できます。詳細については、「[LACP システムプライオリティの設定](#)」(P.35-18) および「[LACP ポートプライオリティの設定](#)」(P.35-19) を参照してください。

LACP システムプライオリティの設定

`lacp system-priority` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して LACP をイネーブルにしているすべての EtherChannel に対してシステムプライオリティを設定できます。LACP を設定済みの各チャンネルに対しては、システムプライオリティを設定できません。デフォルト値を変更すると、ソフトウェアのアクティブおよびスタンバイリンクの選択方法に影響します。

`show etherchannel summary` イネーブル EXEC コマンドを使用して、ホットスタンバイモードのポートを確認できます (ポートステートフラグが H になっています)。

LACP システム プライオリティを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>lACP system-priority priority</code>	LACP システム プライオリティを設定します。 <i>priority</i> の範囲は、1 ~ 65535 です。デフォルト値は 32768 です。 値が小さいほど、システム プライオリティは高くなります。
ステップ 3	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show running-config</code> または <code>show lACP sys-id</code>	設定を確認します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

LACP システム プライオリティをデフォルトの値に戻すには、`no lACP system-priority` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

LACP ポート プライオリティの設定

デフォルトでは、すべてのポートは同じポート プライオリティです。ローカル システムのシステム プライオリティおよびシステム ID の値がリモート システムよりも小さい場合は、LACP EtherChannel ポートのポート プライオリティをデフォルトよりも小さな値に変更して、最初にアクティブになるホットスタンバイ リンクを変更できます。ホットスタンバイ ポートは、番号が小さい方が先にチャンネルでアクティブになります。ホットスタンバイ モードのポートを確認するには、`show etherchannel summary` イネーブル EXEC コマンドを使用します (ホットスタンバイ モードのポートには *H* ポートステート フラグが付加されます)。



(注) LACP がすべての互換ポートを集約できない場合 (たとえば、ハードウェアの制約が大きいリモート システム)、EtherChannel 中でアクティブにならないポートはすべてホットスタンバイ ステートになり、チャンネル化されたポートのいずれかが機能しない場合に限り使用されます。

LACP ポート プライオリティを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>interface interface-id</code>	設定するポートを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	<code>lACP port-priority priority</code>	LACP ポート プライオリティを設定します。 <i>priority</i> の範囲は、1 ~ 65535 です。デフォルト値は 32768 です。値が低いほど、ポートが LACP 伝送に使用される可能性が高くなります。
ステップ 4	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。

	コマンド	目的
ステップ 5	show running-config または show lacp [channel-group-number] internal	設定を確認します。
ステップ 6	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

LACP ポート プライオリティをデフォルト値に戻すには、**no lacp port-priority** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用します。

EtherChannel、PAgP、および LACP ステータスの表示

EtherChannel、PAgP、および LACP ステータス情報を表示するには、表 35-4 に記載されたイネーブル EXEC コマンドを使用します。

表 35-4 EtherChannel、PAgP、および LACP ステータスを表示するためのコマンド

コマンド	説明
show etherchannel [channel-group-number {detail port port-channel protocol summary}] {detail load-balance port port-channel protocol summary}	EtherChannel 情報が簡潔、詳細に、1 行のサマリー形式で表示されます。ロード バランシング方式またはフレーム配布方式、ポート、ポートチャンネル、プロトコルの情報も表示されます。
show pagp [channel-group-number] {counters internal neighbor}	トラフィック情報、内部 PAgP 設定、近接情報などの PAgP 情報が表示されます。
show pagp [channel-group-number] dual-active	デュアルアクティブ検出のステータスが表示されます。
show lacp [channel-group-number] {counters internal neighbor}	トラフィック情報、内部 LACP 設定、近接情報などの LACP 情報が表示されます。

PAgP チャンネルグループ情報およびトラフィック カウンタをクリアするには、**clear pagp {channel-group-number counters | counters}** イネーブル EXEC コマンドを使用します。

LACP チャンネルグループ情報およびトラフィック カウンタをクリアするには、**clear lacp {channel-group-number counters | counters}** イネーブル EXEC コマンドを使用します。

出力内の各フィールドについては、このリリースのコマンドリファレンスを参照してください。

リンクステート追跡の概要

リンクステート追跡は、トランク フェールオーバーとも呼ばれ、複数のインターフェイスのリンクステートをバインドする機能です。たとえば、リンクステート追跡をサーバ NIC アダプタ チューミング機能と共に使用すると、ネットワークで冗長性が実現されます。サーバ ネットワーク アダプタが、チューミングと呼ばれるプライマリまたはセカンダリ関係で設定され、プライマリ インターフェイスでリンクが消失した場合、接続はセカンダリ インターフェイスに透過的に切り替えられます。

図 35-6 (P.35-23) に、リンクステート追跡を使用して設定されたネットワークを示します。リンクステート追跡をイネーブルにするには、リンクステート グループを作成し、そのリンクステート グループに割り当てるインターフェイスを指定します。インターフェイスは、ポートの集約

(EtherChannel)、またはアクセス モードかトランク モードの単一物理ポートです。リンクステートグループでは、これらのインターフェイス同士でバンドルされます。ダウンストリーム インターフェイスは、アップストリーム インターフェイスにバインドされます。サーバに接続されているインターフェイスは、ダウンストリーム インターフェイスと呼ばれ、ディストリビューション スイッチやネットワーク デバイスに接続されているインターフェイスはアップストリーム インターフェイスと呼ばれます。

図 35-6 の設定では、次のようにネットワーク内でのトラフィック フローのバランスが保たれます。

- スイッチと他のネットワーク デバイスのリンクの場合
 - サーバ 1 とサーバ 2 は、プライマリ リンクにスイッチ A を使用し、セカンダリ リンクにスイッチ B を使用しています。
 - サーバ 3 とサーバ 4 は、プライマリ リンクにスイッチ B を使用し、セカンダリ リンクにスイッチ A を使用しています。
- スイッチ A のリンクステート グループ 1
 - スイッチ A はリンクステート グループ 1 を通じてサーバ 1 とサーバ 2 へのプライマリ リンクとなります。ポート 1 はサーバ 1 に接続されており、ポート 2 はサーバ 2 に接続されています。ポート 1 とポート 2 は、リンクステート グループ 1 のダウンストリーム インターフェイスです。
 - ポート 5 とポート 6 は、リンクステート グループ 1 を通じてディストリビューション スイッチ 1 に接続されます。ポート 5 とポート 6 は、リンクステート グループ 1 のアップストリーム インターフェイスです。
- スイッチ A のリンクステート グループ 2
 - スイッチ A はリンクステート グループ 2 を通じてサーバ 3 とサーバ 4 へのセカンダリ リンクとなります。ポート 3 はサーバ 3 に接続されており、ポート 4 はサーバ 4 に接続されています。ポート 3 とポート 4 は、リンクステート グループ 2 のダウンストリーム インターフェイスです。
 - ポート 7 とポート 8 は、リンクステート グループ 2 を通じてディストリビューション スイッチ 2 に接続されます。ポート 7 とポート 8 は、リンクステート グループ 2 のアップストリーム インターフェイスです。
- スイッチ B のリンクステート グループ 2
 - スイッチ B はリンクステート グループ 2 を通じてサーバ 3 とサーバ 4 へのプライマリ リンクを提供します。ポート 3 はサーバ 3 に接続されており、ポート 4 はサーバ 4 に接続されています。ポート 3 とポート 4 は、リンクステート グループ 2 のダウンストリーム インターフェイスです。
 - ポート 5 とポート 6 は、リンクステート グループ 2 を通じてディストリビューション スイッチ 2 に接続されます。ポート 5 とポート 6 は、リンクステート グループ 2 のアップストリーム インターフェイスです。
- スイッチ B のリンクステート グループ 1
 - スイッチ B はリンクステート グループ 1 を通じてサーバ 1 とサーバ 2 へのセカンダリ リンクを提供します。ポート 1 はサーバ 1 に接続されており、ポート 2 はサーバ 2 に接続されています。ポート 1 とポート 2 は、リンクステート グループ 1 のダウンストリーム インターフェイスです。
 - ポート 7 とポート 8 は、リンクステート グループ 1 を通じてディストリビューション スイッチ 1 に接続されます。ポート 7 とポート 8 は、リンクステート グループ 1 のアップストリーム インターフェイスです。

リンクステートグループでは、ディストリビューションスイッチまたはルータに障害が発生したり、ケーブルが切断されたり、またはリンクが消失したために、アップストリームポートが使用できなくなったり、接続が切断される場合があります。リンクステート追跡機能がイネーブルの場合の、ダウンストリームとアップストリームインターフェイス間の相互作用を次に示します。

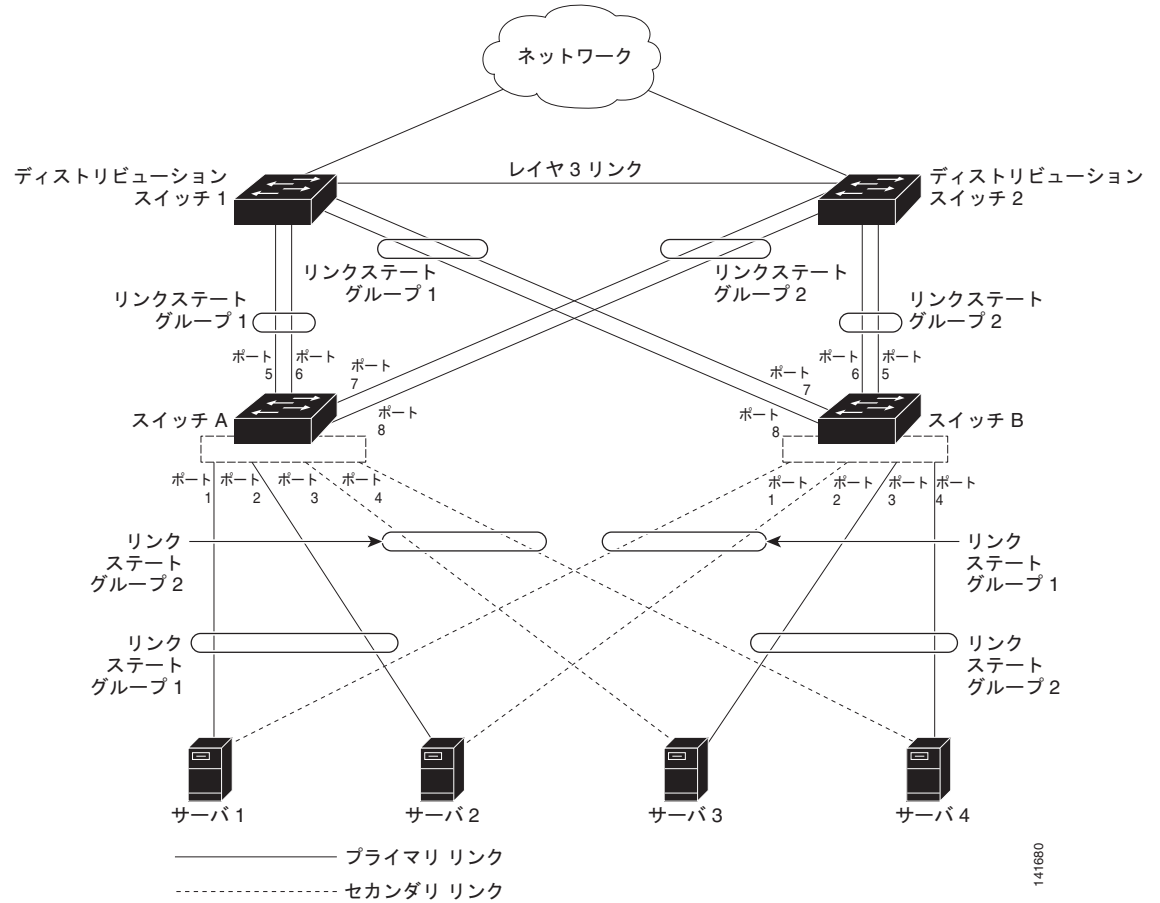
- アップストリームインターフェイスのいずれかがリンクアップステートである場合、ダウンストリームインターフェイスをリンクアップステートに変更するか、リンクアップステートのままにすることができます。
- すべてのアップストリームインターフェイスが使用できなくなった場合、リンクステート追跡機能はダウンストリームインターフェイスを自動的に `errdisable` ステートにします。サーバへの接続は、プライマリサーバインターフェイスからセカンダリサーバインターフェイスに自動的に変更されます。

スイッチ A のリンクステートグループ 1 からリンクステートグループ 2 への接続の変更例については、[図 35-6 \(P.35-23\)](#) を参照してください。ポート 6 のアップストリームリンクが切断されても、ダウンストリームポート 1 および 2 のリンクステートは変わりません。ただし、アップストリームポート 5 のリンクも切断された場合、ダウンストリームポートのリンクステートはリンクダウンステートに変わります。サーバ 1 およびサーバ 2 への接続は、リンクステートグループ 1 からリンクステートグループ 2 に変わります。ダウンストリームポート 3 および 4 は、リンクグループ 2 に属するため、ステートが変わりません。

- リンクステートグループが設定され、リンクステート追跡がディセーブルであり、アップストリームインターフェイスの接続が切断しても、ダウンストリームインターフェイスのリンクステートには変更はありません。サーバはこのアップストリーム接続が切断されたことを認識しないため、セカンダリインターフェイスにフェールオーバーしません。

障害のあるダウンストリームポートをリンクステートグループから削除することで、ダウンストリームインターフェイスのリンクダウン状態から復旧できます。複数のダウンストリームインターフェイスを復旧させるには、リンクステートグループをディセーブルにします。

図 35-6 一般的なリンクステート追跡の設定



リンクステート追跡の設定

ここでは、リンクステート追跡ポートの設定について説明します。

- 「デフォルトのリンクステート追跡の設定」 (P.35-23)
- 「リンクステート追跡の設定時の注意事項」 (P.35-24)
- 「リンクステート追跡の設定」 (P.35-24)
- 「リンクステート追跡ステータスの表示」 (P.35-25)

デフォルトのリンクステート追跡の設定

リンクステートグループは定義されておらず、リンクステート追跡はどのグループでもイネーブルではありません。

リンクステート追跡の設定時の注意事項

設定上の問題を防ぐため、次の注意事項に従ってください。

- アップストリーム インターフェイスとして定義されているインターフェイスは、同じまたは異なるリンクステート グループ内でダウンストリーム インターフェイスとして定義できません。その逆も同様です。
- 1つのインターフェイスが、複数のリンクステート グループのメンバーになることはできません。
- スイッチ 1 つにつき設定できるリンクステート グループは 2 つだけです。

リンクステート追跡の設定

リンクステート グループを設定し、そのグループにインターフェイスを割り当てるには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>link state track number</code>	リンクステート グループを作成して、リンクステート追跡をイネーブルにします。グループ番号は 1 ~ 2 に設定できます。デフォルトは 1 です。
ステップ 3	<code>interface interface-id</code>	物理インターフェイスまたはインターフェイスの範囲を設定して、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。 有効なインターフェイスには、アクセス モードまたはトランク モード (IEEE 802.1q) のスイッチ ポート、ルーテッド ポート、EtherChannel インターフェイス (スタティックまたは LACP) にバンドルされた、トランク モードの複数ポートが含まれます。
ステップ 4	<code>link state group [number] {upstream downstream}</code>	リンクステート グループを指定し、グループ内のインターフェイスを upstream または downstream インターフェイスに設定します。グループ番号は 1 ~ 2 に設定できます。デフォルトは 1 です。
ステップ 5	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	<code>show running-config</code>	設定を確認します。
ステップ 7	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

次に、リンクステート グループを作成してインターフェイスを設定する例を示します。

```
Switch# configure terminal
Switch(config)# link state track 1
Switch(config)# interface range gigabitethernet1/0/21 -22
Switch(config-if)# link state group 1 upstream
Switch(config-if)# interface gigabitethernet1/0/1
Switch(config-if)# link state group 1 downstream
Switch(config-if)# interface gigabitethernet1/0/3
Switch(config-if)# link state group 1 downstream
Switch(config-if)# interface gigabitethernet1/0/5
Switch(config-if)# link state group 1 downstream
Switch(config-if)# end
```

リンクステート グループをディセーブルにするには、`no link state track number` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

リンクステート追跡ステータスの表示

show link state group コマンドを使用してリンクステート グループの情報を表示します。すべてのリンクステート グループの情報を表示するには、このコマンドをキーワードなしで入力します。特定のグループの情報を表示するには、グループ番号を入力します。グループの詳細情報を表示するには、**detail** キーワードを入力します。

次に、**show link stage group 1** コマンドの出力例を示します。

```
Switch> show link state group 1
```

```
Link State Group: 1      Status: Enabled, Down
```

次に、**show link stage group detail** コマンドの出力例を示します。

```
Switch> show link state group detail
```

```
(Up):Interface up      (Dwn):Interface Down  (Dis):Interface disabled
```

```
Link State Group: 1 Status: Enabled, Down  
Upstream Interfaces : Gi1/0/15(Dwn) Gi1/0/16(Dwn)  
Downstream Interfaces : Gi1/0/11(Dis) Gi1/0/12(Dis) Gi1/0/13(Dis) Gi1/0/14(Dis)
```

```
Link State Group: 2 Status: Enabled, Down  
Upstream Interfaces : Gi1/0/15(Dwn) Gi1/0/16(Dwn) Gi1/0/17(Dwn)  
Downstream Interfaces : Gi1/0/11(Dis) Gi1/0/12(Dis) Gi1/0/13(Dis) Gi1/0/14(Dis)
```

```
(Up):Interface up      (Dwn):Interface Down  (Dis):Interface disabled
```

出力フィールドの詳細については、このリリースに対応するコマンド リファレンスを参照してください。

